AGC レポート
山岳地理クラブ会報

VOL　77

発行 2022 年 2 月 28 日
公益社団法人 日本山岳会　山岳地理クラブ
URL●www.jac.or.jp/doukoukai

・越境する山と渓(3)(後編)／/埼玉の富士塚

シリーズ　分水嶺を越える県境・市町村境

―越境する山と渓―(3)　三国峠と上信国境　(後編)

富永　滋

三国峠には、御阪三社神社(三国大権現)として、弥彦大明神、諏訪大明神、赤城大明神と三国の明神が合祀されている。三国峠が重要な三国街道筋に組み込まれたのは、寛永 8 年(1631)の猿ヶ京関開設に伴うもので、それまではむしろ中之条、四万を通って三坂峠を越え浅貝へ抜ける道が街道筋であった。御阪三社神社は、峠道の三国峠への移動に伴い一緒に移動されたものである。「三坂」とは「三堺」のことであり、かつてそこにあった三国境も三国峠へ移動したと見られる。そのため信濃国はそれまでよりさらに東へと歪な伸延を行わざるを得なくなった。

長野県が山伝いに延々と三国峠まで伸びていた理由は、やはり松代藩の領地に関係すると見るのが自然であろう。長野県の前身とも言える松代藩は、元和8 年(1622)に真田信之が長野県長野市から群馬県沼田市に渡る広大な領地を封じられたのに始まる。この領地を分割して、長男信吉が沼田領、次男信政が松代領を譲り受けた結果、上信国境を挟んで沼田藩と松代藩とが接するようになった。両藩が対峙する長大な境界の東端が三国峠(現在の三坂峠)であった。しかし藩政が廃止され、加えて不明瞭だった山間部の複雑な地形が明らかになるに連れ、地政学的な県境に置き直されたためと考えられる。陸地測量部による明治 20 年の 20 万分の 1 輯製図、農商務省による実測を踏まえた等高線入りの明治 22 年の 20 万分の 1 地図は、いずれも長野県の範囲を白砂山付近まで後退させ、長野県は清津川上流域を失う形になった。この県境変更の決定はいつ誰によって行われたものかは定かでないが、藩政時代そのままの県境が近代的な測量や調査に基づき変更されることは、当時頻繁に行われていたので、驚くことではない。だが絵図に比べ一見近代的に見える国が発行した地形図も、三角測量によらぬものであったため依然として地形間違いが多く、特に山間部では不確かなものであった。それもあってか明治 30 年代の長野県諸地図は、依然として三国峠までが長野県であったり、苗場山が完全に長野に含まれていたりしていた。この曖昧さは中津川上流も同様で、例えば明治 13 年の長野県全図では現在より長野側に食い込んだ大倉山～笠法師の線が上信県境とされていた。

明治 23 年に国土の基本図を 5 万分の 1 とすることが決定され、全国規模の三角測量が開始された。関東や上信越の山岳地帯にはようやく明治 40 年前後に測量の手が及んだ。その時残された三角点の測量記録に記された所在地を参照すると、野反湖北方では、セン沢右岸の大倉山(2054.1m)、左岸の小泉三等三角点(1938.9m)が群馬県とされている。明治時代の諸文書を見てもこの辺りが県境と認識されていたと思われる。野反湖西方では、大高山(2079.6m)、断沢ノ頭(2040.5m)の各標点の地籍が六合(クニ)村大字入山字魚ノ川であることから、魚野川源流部が群馬の一部とされていた節がある。

魚野川中流左岸の 1575.7m 標点は平穏(ヒラオ)村大字沓野区字岩菅とされ、左岸支沢の黒沢より奥を上州分とする上州の江戸末期の国絵図や地元漁師の川割りに符合する。烏帽子岳や笠法師山、又七山も平穏村になるが、セン沢右岸、雑魚川下流左岸の標点は堺村とされた。ただし現代の地籍は正確な地形図がなかった明治初期の作成であるため実際の行政区画や地形と必ずしも一致せず、上信国境では地籍の重複が散見された。

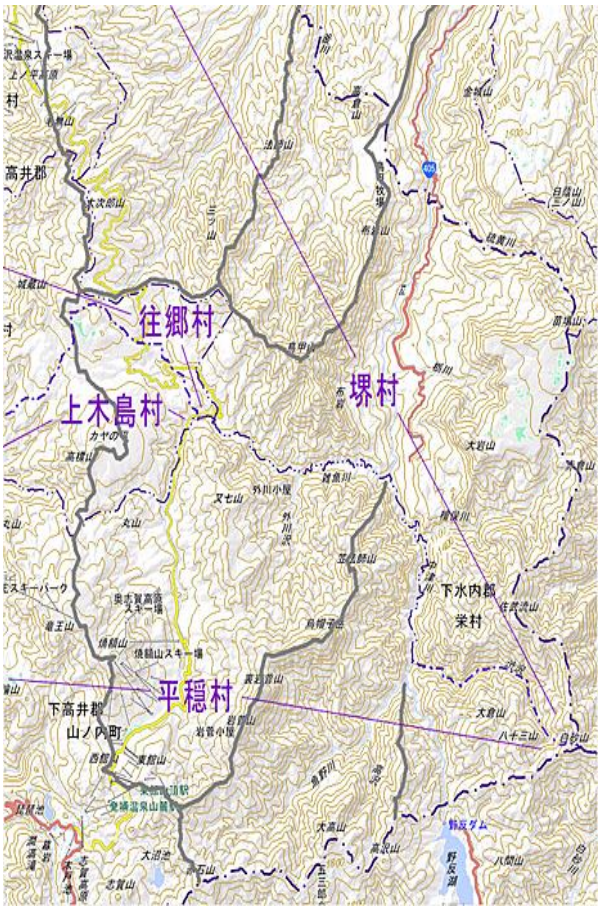


図 3 *雑魚川へと分水嶺を越境する北信濃の四村(昭和 30 年以前)　出典:国土地理院「地理院地図」*

三角測量による5万分の1地形図は、大正初期に初版が刊行され、初めて正確な県境が明らかになった。この時点で新潟側の水系に食い込んだ長野県の区域は、群馬県に属する野反湖周辺を除いた中津川の上流域であった。正確な地形図の刊行により、県境のみならず山間部の厳密な市町村界の画定も可能になった。長野県に留まった中津川水系源流部が、本拠を志久見川に置く堺村、夜間瀬川に置く平穏村のどちらに帰属するかが、問題になった可能性がある。両村の何れにとっても峰越えの位置になるが、初版の地形図では、満水川より下流の雑魚川左岸と切明より下流の中津川両岸が堺村、雑魚川源流左岸の、清水小屋(清水沢)から満水川までの短区間が往郷(オウゴウ)村、剣沢から清水小屋(清水沢)までが上木島村、大洞沢から剣沢までが夜間瀬村、雑魚川の大洞沢より上流左岸と右岸の全て、また切明から魚野川

左俣に当たるセン沢の右岸支沢渋沢左岸から白砂山までの全てが平穏村となっている。なお野反湖周辺のセン沢源流部は群馬県六合村である。

中津川上流の複雑な勢力分布は、江戸時代以来の入会（いりあい）に由来するものである。江戸時代の松代藩では、沓野村が「志賀山」、湯田中村が「焼額山」を持山とし、沓野村と湯田中村の入会地（共有地）が「岩菅山」であった。また天領では、上木島村が「木島山」、箕作（ミツクリ）村の屋敷が「鳥甲山」と雑魚川支流の外川一帯を持山としていた。代々の漁業権は、平穏が雑魚川の清水小屋から上、上木島が清水小屋から屏風滝（外川沢出合の少し上流）、屋敷が屏風滝より下と外川沢、和山が魚野川の黒沢まで、上州六合村が黒沢の上、と決まっていた。雑魚川の「雑魚」とはイワナのことで、鮭など海で採れる大物に対しそう呼ばれていたが、イワナとしては大ぶりで漁獲量も豊富であった。山中で魚は珍しい上、滋養強壮に良いと、草津、発哺のような温泉地へ持っていくと良い値段で売れた。そのため六合村の漁師は中央分水嶺を越えて魚野川まで釣りに行き、和山の漁師は峻険な草津街道を越えてはるばる草津まで売りに通った。このように持山・入会と狩場・漁場がほぼ重なるのは、しばしば猟師と漁師が同一人であったからであり、その活動範囲が村界を形作っていた。

松代藩有林に起源を持つ現在の山ノ内町の雑魚川と魚野川への利権は、佐久間象山の活躍を通じて、より一層強固になったと見られる。松代藩は天領（徳川領）の中の飛び地として湯田中村、沓野村（現在の渋）を領有し、さらに志賀高原一帯には御巣鷹山が転じた藩有林を持っていた。藩の湯田中・沓野・佐野三村の利用係（現代風に言えば開発課）に任命された佐久間象山は藩財政の強化を目的として、かねてから鉱脈や温泉などの天然資源で知られる秋山郷内の藩領で調査を行った。象山は魚野川付近で鉱脈を発見し、切明温泉を見出した。ただ当時の鉱山開発は権利保全のため機密裏に進めたらしく、詳細は明らかになっていない。

山麓から見て山の裏側にある雑魚川は、水源としてもまた、山麓の村々に大きな意味を持っていた。大部分が天領である北信地方では幕府により夜間瀬川からの引水が禁じられ、小さな樽川の水をめぐって幾度も集落同士の争いが勃発した。水利の悪い山裾や台地は利の薄い畑地にすることが多かったが、一部の村では、江戸末期から明治にかけ、雑魚川から競って延々と長大な水路を開削し水田を開拓した。志賀高原やカヤノ平から山麓にかけて、支線を含めると十数本の水路が作られ、幾つかは今でも使用されている。主な水路として、岩菅山アライタ沢から高天ヶ原、焼額山の南を巡って上条集落に至る上条堰、奥志賀から焼額山の北を廻って須賀川集落、横倉集落に至る須賀川堰・横倉堰が知られており、また満水川の水をカヤノ平越しに樽川に落とす水路もあった。明治初期に国が強制的に無住の山間部を官有地とした際は、千曲川に近い山麓の村々と強く結びついた雑魚川、魚野川の利権を守るため、地元の村は激しく抵抗し訴訟を起こした。彼らは松代藩の統治・利用の実態を根拠に勝訴し、雑魚川、魚野川、セン沢左岸を民有地に戻すことに成功した。

明治時代に確定した町村界は、合併による境界の消滅を除けば、今日まで基本的に変わっていない。唯一の変更は、昭和 31 年の、セン沢右岸における支沢の渋沢左岸の大倉山から白砂山にかけての山ノ内町から堺村への移管であった。発端は、切明の魚野川と雑魚川の合流点の左岸側に設置された東京電力切明発電所の帰属をめぐる協議であった。その地点は、堺村、平穏村の両村の地籍を持っていたのである。協議のさなか平穏村は山ノ内町に吸収合併されたので、31 年に山ノ内町と堺村との間で、切明から野反湖へ向かう川筋の左岸が山ノ内町、右岸が堺村との合意がなされた。発電所を放棄し税収の見込みを失った堺村へは、山ノ内町から補償金が支払われた。この取り決めにより、渋沢左岸の大倉山、八十三山付近が堺村に移管された。この一帯は明治以降、群馬県六合村、長野県平穏村、長野県堺村と、転々と所属換えが起きたことになる。また山ノ内町内であるにも関わらず長野側からの到達路がなく管理が及ばぬ魚野川上流では、昭和になっても江戸時代以来の群馬県六合村入山の漁師による協約的な漁業権が続いていた。長野の漁師が魚野川に入るようになった昭和 25 年頃とされ、それ以降、県境を尊重して群馬の漁師は長野の鑑札を取るようになったという。

埼玉の富士塚

渡辺　真一

日時:　2021 年 10 月 23 日（土）　志木駅集合 10:00～西武球場前駅解散 16:30

天候:　晴　気温（所沢）:　最高 18℃　最低 7℃

参加者:　今井、鎌田、近藤、市川、渡辺（敬称略、計 5 名）

コースと時刻記録:　東武東上線志木駅（浦和駅西口行きバス）9:50～10:00 富士道入口バス停～10:10 敷島神社田子山富士 10:25～30 新河岸川・柳瀬川合流点～10:35 市場坂上バス停 10:50～11:00 志木駅東口～池袋～所沢～12:25 西武新宿線狭山市駅（昼食）

狭山市駅西口（狭山グリーンハイツ行きバス）12:55～13:05 下広瀬バス停～13:10 広瀬浅間神社～13:16 富士塚 13:30～14:12 西武池袋線入間市駅～14:35 西武狭山線下山口駅

下山口駅 14:40～14:55 荒幡富士 15:07～15:25 西武山口線西武園ゆうえんち駅～西武球場前駅

西武球場前駅 15:35～15:41 狭山不動寺 15:45～16:00 狭山富士～16:10 玉湖神社～16:15 山口観音金乗寺～16:20 二等三角点「上山口」～16:30 西武球場前駅

前日の金曜日は一日中冷たい雨が降り続いていたが、当日は、

からりと晴れ上がり気温も高くなってハイキング日和だった。志木駅東口の 3 番バス乗り場に全員が 10 時前にそろったので、すぐに浦和駅西口行きのバスに乗り込む。富士道入口というバス停にて下車、古道らしき「富士道」を 10 分ほど歩いて田子山富士のある敷島神社に到着した。余談だが、この「富士道（ふじみち）」の名前に引っ掛かったので Web 検索してみた。このバス停の「富士道入口」以外には何もヒットしなかったが、ようやく見つけた地図によると「富士道」は、本町一丁目の交差点から 200mほど直進し敷島神社の方角には曲がらず、さらに 250mほど直進したところにある「御嶽神社」から新河岸川の方に曲がって突き当たったところで終わっている、わずか全長 700mほどの道らしい。終点（あるいは始点）は、玉川上水から分岐した「野火止用水」が新河岸川に合流する地点でもある。想像だが昔、新河岸川の船からここで下りた人たちが志木の町に入って行く際に、「田子山富士」を眺めながら歩いたので「富士道」と名付けたのではないだろうか・・・。さて、田子山富士は高須庄吉という人物によって、明治 2 年から 3 年をかけて作られたものである。彼は当時、志木の中心であった引又宿で醤油製造業を営んでおり、富士山信仰に篤い人だった。田子山富士は、麓の円周125m、高さ9m、斜度39度の立派な富士塚だ。「田子山富士保存会」という組織があり、当日もパンフレットを配ったりしていた。山には多くの石碑が配置され、富士山信仰の深さを知ることができた。山頂からは少々建物が邪魔しているものの、本物の霊峰富士が眺められた。この田子山富士は、富士塚としての 6 要件全てを満たしている極めて希な例とのこと。その 6 要件というのは以下のようなものらしい。

① 「山頂に祠」があること。
② 「烏帽子磐」があること。
③ 「小御岳神社」があること。
④ 富士山の溶岩「黒ぼく」があること。
⑤ 「御胎内」（地下洞穴）があること。
⑥ 「霊峰富士を遥拝」できること。

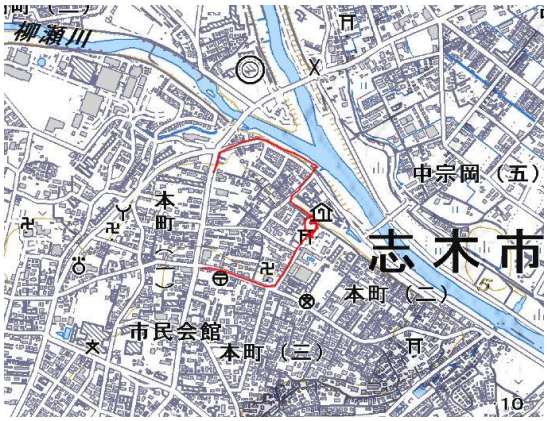
この田子山富士塚はいつでも登れるわけではない。基本的には「大安」と「友引」の両日（1ヵ月に 10 日ほど）の 10 時から 15 時の間のみ入山が許されている。コロナ禍の緊急事態宣言中は完全に閉山されていて、直前の 10 月 1 日から入山可能となったばかりだった。もらった入山日予定表によると、11 月は第 1 週と 2 週の土日が七五三で入山できるような特例的計らいもある。下山後、御胎内を外からのぞき見た後、ルストホフ志木というモダンな特別養護老人ホームの前を通り、直ぐ近くを流れる新河岸川に出た。ちょうどそこは柳瀬川との合流点であった。柳瀬川の源流は、今日これから訪れる荒幡富士や狭山富士がある多摩湖と狭山湖である。新河岸川から駅方向に少し戻ると「旧西川家潜り門」という歴史的建造物があり、その前の市場坂上バス停から志木駅に戻った。なお、「志木宿」という名称は宿場を表す宿ではなく、町の名称＝固有名詞として使われたらしい。志木は江戸時代から船の往来が盛んであり、商人が多く住んでいたとのことだ。先ほど通った新河岸川と柳瀬川の合流点に作られた引又河岸がその中心だったとか。門が残る西川家は酒造業、水車業、肥料商を営むかたわら、この町の組頭役を務めていた名家だそうだ。

志木駅から池袋に戻り、西武池袋線にて所沢で乗り換え、西武新宿線の狭山市駅に向かう。バスの時刻を確認すると 30 分ほど待ち時間があったのでそこで昼食タイムとする。バス停側のベンチで奥多摩や秩父の山々を間近に見渡しながら昼食を摂った。バスに乗り、新富士見橋で入間川を渡って左折し、入間川と平行に西に向かう。下広瀬バス停で下車し、広瀬神社を経由して富士塚のある広瀬浅間神社へ。そこは入間川から 500m ほど離れた左岸の河岸段丘になっており、その段差を利用して江戸末期に作られた富士塚は高さ 9mほどである。この神社では毎年 8 月 21 日に火まつりが行われているが、富士吉田に鎮座する富士浅間神社の鎮火祭を模倣して始まったものらしい。木が邪魔をして山頂から富士山は見られなかったが、下って入間川沿いを歩いている時に富士山が見えた。豊水橋で再び入間川を渡り、車の行き交う舗装路を延々と歩き国道 16 号を横切って急坂を登り切ったところが池袋線の入間市駅。この隣には元々米軍基地であった稲荷山公園や、その先には自衛隊の入間航空基地が並んでいる。

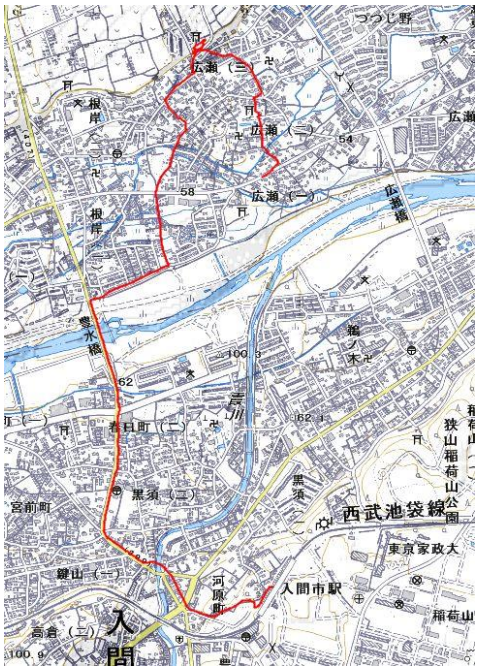
入間市駅から西武池袋線で池袋方面に戻り、西所沢で狭山線に乗り換え、次の下山口で下車。歩いて 15 分ほどで荒幡富士に到着。明治 17 年から 15 年もの歳月をかけて作られた荒幡富士は、標高 119mで高さは 12m のしっかり作られた富士塚だが、関東大震災や東日本大震災で崩れたため修復が行われたそうだ。ここも田子山富士と同様、「荒幡富士保存会」が清掃などの管理を行っているとのことだ。山頂からは生い茂る樹木の上に本物の富士山もよく見えたが、残念なことに西武が経営する菊水亭というホテルが自然の景観を壊してしまっている。富士塚の参道には小さなホトトギスが咲いていたのが印象的だった。麓には浅間神社がある。

荒幡富士から西武園ゴルフ場の脇を巡り、西武園ゆうえんち駅に到着。昔は SL も走っていたという山口線で西武球場前に移動。そこからは狭山不動寺の境内を抜けるルートにした。寺の西門が 15:45 に閉門となると書かれてあったので急いで通過。東京都と埼玉県の県境となっている、多摩湖と狭山湖の間の道を西に進

む。玉湖神社の直ぐ隣が狭山富士だが、下見に行ったときは看板も標識も何もなかったので行き過ぎてしまい戻ったくらい寂れたところだ。ちなみに狭山富士は所沢市に隣接する東京都東大和市の管轄である。標高151mで高さ18m、昭和8年に竣工された新しい富士塚だ。山頂の雪を模して上部をコンクリートで固めたらしいが、翌年の大雨で崩れてしまい、「泥ッ富士」と呼ばれていたとのこと。Web で竣工当時の写真を見つけたが、「展望台」とありどうやら観光目的で作られたようだ。草に覆われた荒れた道を登ると、ここからも富士山がよく見えた。あるサイトには南側の道は玉湖神社に出られるとあったので下ってみたが、玉湖神社の下を通り過ぎてしまう道だった。そこから道を横切って山口観音金乗院に出た。ここに二等三角点があるというので探したところ、奥の院五重塔の脇の高台にそれらしきものが見つかった。標識には「三角点」としかなかったが、標高 137.1mの「上山口」である。再び西武球場前駅に出て解散となったが、鎌田、近藤、渡辺の 3 名は所沢にて久々の反省会を持った。



田子山富士塚



広瀬浅間神社富士塚

荒畑富士

狭山富士

AGC レポート　vol-77　2022 年 2 月 28 日発行
発行：公益社団法人　日本山岳会　山岳地理クラブ
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会　気付
TEL　03-3261-4433　　FAX　03-3261-4441
編集担当：近藤　　E-mail：yoshi-kondo@jcom.home.ne.jp